少しでも落ち着いて物事に取り組む子

～運動の楽しさを知り、友達と一緒にからだを動かす子～

1．対象児（K・K　高3男）のプロフィール

(1) 障害名　　自閉的傾向

(2) 生育歴

・昭和47年6月29日生まれ、18歳4か月

・未熟児として出生（長男）

県立中央児童相談所の3歳児検診で自閉的傾向と診断される。

本校小学部・中学部を経て、高等部に入学、現在へ至る。

・家族は4人で、本人、両親、妹。母親は教育熱心で進路への関心も高い。

(3) 本生徒の実態

①運動能力テスト（「資料編」参照）

②体力テスト　　（「資料編」参照）

③性格、行動上の特徴

パターン化されたことには、見通しを持って取り組もうとするが、情緒の不安定に伴い、独り言が多くなったり、教室を歩き回ることがある。相手の話を聞こうとする姿勢があり、場面に応じた行動をしようとするが、こだわりや思いこみが強く、自分勝手と思われるような言動が多くみられる。また、物事に対して、柔軟性のある応用的な対応が苦手である。

しかし、自分の興味や関心のあることについては、粘り強く活動することができ、集中力もある。記憶力が大変良く、行事の日程・カレンダー等をよく覚えている。

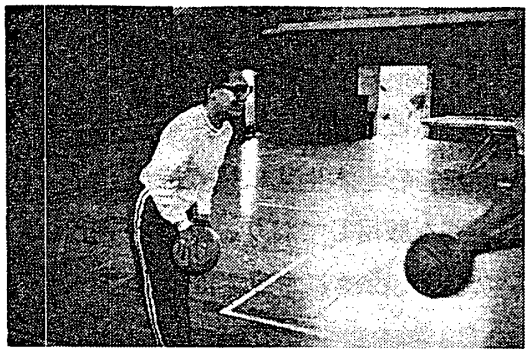
2．各場面での実践例

(1) 保健体育　　〈Bグループ〉

①ねらい

・運動の持つ楽しさを味わわせ、みんなと共に練習やゲームをする。

②方針と手だて



・少しでも見通しを持って練習やゲームに取り組めるように、ゲーム→練習→ゲームの形式をとる。

・ボール慣れにおいては、最初はすこし小さめのドッジボールを使わせ、少しでも扱いやすいようにさせる。そしてゆっくりと一つひとつの

運動を正確にさせることを意図として、取り組ませる。

・運動そのものの楽しさを味わわせるために、少しでも詳しくかつ正しく実態を把握し、具体的なめあてを持たせ、すすんで取り組めるようにし、できた喜びや充実感を持たせる。

③変容例

単元名	初めの実態	方針と手だて	指導後の様子
・短距離走 ○50メートル走 ○8秒間走等 ○変形スタートダッシュ等	スタートは、スタンディングスタートで、どうしてもフライング気味でスタートしてしまう。相手を意識しすぎて全力走までに至らなかった。	視覚ではなく、音を聞いてから反応してスタートできるようにダッシュ練習をした。同程度の走力の者を競争相手とした。	少しずつフライングは少なくなってきたが、まだはじめに指示しないと早く出ようとした。50メートルのタイムが延び、全力走に近づきつつある。
・リレー ○バトンタッチの練習 ○リレー	バトン渡しは右手もらい左手渡しで、じっとして後ろをむいてバトンをもらっていた。	チームでどうしたらスピードを落とさずにバトンを渡せるか考えさせた。バトン渡しを具体的に指導した。	友だちに教えてもらいながら、少しずつバトンもらう場所を変えたり、動きながらもらったりできるようになった。
・バスケットボール ○ボール慣れ ○ゲーム→練習→ゲーム	連続ボール渡しでは、1メートル位の間隔で始め何回もボールをぶっつけうまく相手に渡せなかった。	相手をよく見、ボールを投げる方向を確認させた。投げた後ボールを受けることを指示した。	はじめは0回だったが4回5回と出来始めた。2メートル間隔にするとボールが届かなかった。手本を見せると少しずつ出来始めた。

(2) 養護・訓練〈c1グループ〉

①ねらい

・少しでも見通しを持って運動し、主に柔軟性を高める。

②方針と手だて

養護・訓練のプログラムを固定し、その中に欠点を補い、長所を伸ばしていく要素を入れておく。それにより、繰り返していく中でいつの間にか、力がついていくようにしておく。c1グループは自閉的傾向の生徒により構成されているので、上記のような基本方針が必須だといえる。

③変容例

本生徒は、前屈・後屈といった柔軟性に欠けるため、サーキット運動の中にタイヤ上の背そらしを取り入れ、重点的に指導した。背そらしを始めたころには、30秒間も耐えられず、すぐにやめてしまった。しかし、繰り返し具体的な声かけによる指導を継続することにより、日に日に耐えられるようになり、らくに3分間ぐらい寝ていられるようになった。

次に、ジャングルジムなどを使い、四つん這いになり、前進したり、後進したりする運動をサーキット運動の中に入れた。

前進する運動については、ゆっくりだが初めから出来た。しかし、後進することにはとても恐怖感をもち、拒否反応を示したが、すぐ下で付き添い、足を支えたり一緒に運動し安心感をもたせるようにした。みんなと一緒に活動し、他人が成功するのを見て、自分からやるまではいかないが、あのようにすればいいのだとまねをし、足で探り、長い時間をかけて頑張ることができだした。何回か成功するうちに自信がつき次第に早く渡れるようになった。

もともとｃ1グループの生徒は身体的な機能面では出来る能力を持っていた。それを計画的な活動により引き出すことができた。

(3) 職業〈技能グループ〉

①ねらい

粘り強く集中して取り組む。

②方針とてだて

いかに興味を持たせるかが、本生徒の場合、特に集中して継続して仕事をするかどうかを決めるキイポイントになる。そのために同じクラスの生徒と組み合わせ仕事をさせたらどうだろうかと考えてみた。

③取り組みと変容

技能グループは、活字印刷に関係がある仕事をし、はがきや礼状を印刷し、製品を注文主に配達する。商品といえる程度の品物を作ることを目標としている。

本生徒は、活字の返還は自信を持って行うが、活字拾いは初めから苦手でやろうとしないことが多い。特に、漢字の活字を拾う必要があっても漢字を少ししか知らず平仮名で拾ってしまうことが多い。集中していないときには、独り言が多い。

活字を返しているＫ・Ｋ

活字を取り出したり、返したりする間違いが多いので、眼が悪いのでは無いかと考えた。そこで目の再検査を行い、度の合った乱視用の眼鏡をかけるようになった。

これにより、よく見えだしたり、頭が痛くなくなったようで仕事に集中する時間が長くなると共に活字の返還作業の失敗が少なくなった。

次に、３年生同士で相手を決め、指導させるようにした。このことにより、常に見られてい

ることとなり、今までと違いいいかげんな仕事をすることが出来なくなった。

さらに、確実に活字を元の位置に正しく返すことを徹底的に指導した結果、活字を元の位置に返すのに間違いが減少し、再点検の必要が無くなり、能率が良くなった。それらだけではなく、本生徒が自信を持つこととなった。

(4) 生活一般（日常生活指導）

①ねらい

他人の話をしっかりと聞き、場に応じた行動をする。

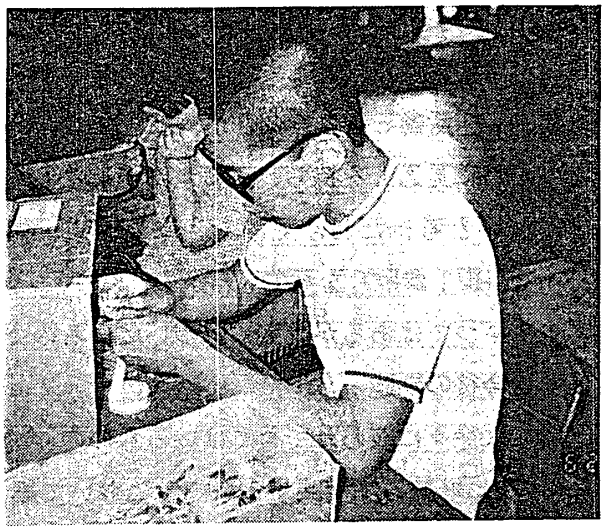
②方針と手だて

機会をとらえて、してよい時（こと）、してはいけない時（こと）を具体的に指導する。

③変容例

本生徒は、例えば他人の鋏を無断で使うことが時々ある。無断で他人のものを使ってはいけないとその時その時にすぐ指導する。しかし、した後で注意をしてもあまり効果はなかったので、無断で使おうとするその直前に指導するようにしたら効果的であった。一番このような場面に級友が直面することが多いので、級友にも声かけをするように指導をしている。時々、級友や教師の指摘により、許可を得てから使用することもあるが、現在も自分から許可を得て使うまでには至っていない。

また、集団の中においては、教師や級友などの話を聞いて、みんなと共に活動したり、独り言も少なくなってきた。これは、自分を受け入れる人々が周りにいることで心の安定がはかれるようになったからだと思われる。



現場実習中のK·K

3．考察及び今後の課題

このような実践の結果、本生徒は本校高等部に入学した当時と比較しても、見通しを持って少しずつ集中して物事に取り組めるようになりつつある。それも様々な生活経験や実体験での具体的かつ意図的な指導の積み重ねの成果であると思われる。

特に現場実習での実社会の体験、10分間走や保健体育でのなわとびやバスケットボール等での実践、さらに高等部三年生になって自覚が目芽え、将来への見通しを自分なりに持ち始めたということ等が、本生徒にとって自信となり、飛躍の要因となったと確信してやまない。

今後の課題として、残り少ない学校生活ではあるが、指示をよく聞き、少しでも場に応じた対応ができるようになることが望まれる。そのためには、場を意識させ、今自分は何をすべきかを常に考えさせ、気づかせることによって見通しを持たせ、すすんで物事に取り組めるように、今後指導実践を重ねていきたいと考えている。

（文責　鹿本　　功）